

自然と人と。

RISHIRI-
REBUN-
SAROBETSU
NATIONAL PARK

さいはての大地の50年

利尻礼文サロベツ国立公園
50周年記念誌

National
Parks
of Japan



自然と人と。 さいはての大地の50年

最北の国立公園である利尻礼文サロベツ国立公園は、指定から半世紀を迎えます。この地域では、洋上に浮かぶ利尻山をシンボルに、希少な植物が咲き誇る礼文島、泥炭が積み重ねられてできたサロベツの雄大な湿原など、悠久の時間の中で形作られてきた豊かな自然景観を楽しめます。

この景観は、自然の営みだけで築き上げられたものではなく、それぞれの地域で自然を守り、活かしながら生きる人々の営みが自然と交わりながら築き上げたものでもあります。利尻礼文サロベツ国立公園の保全と発展のため、多くの方々に長年にわたり格別のご尽力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

50年という節目を迎える今、この記念誌を通じて利尻礼文サロベツ国立公園の魅力改めて見つめ直し、この地域で活動されてきた人たちに思いを馳せ、この地域で紡がれてきた物語の一端に触れていただければと思います。

そして、様々な想いを受け継ぎながら、わが国の最北に位置するたぐい稀な自然の恵みを絶やすことなくこの先にも繋げ、地域の誇りや宝としてより一層輝かせるとともに、自然と人とが持続可能な形で共生する未来を皆さまたともに築いていくことが私たちの願いです。

北海道地方環境事務所長
山本 麻衣

利尻礼文サロベツ国立公園

RISHIRI-REBUN-SAROBETSU NATIONAL PARK

CONTENTS

002	MESSAGE
	半世紀を迎えて
004	MAP
	イラストマップ
006	PHOTO INTRODUCTION
	最北の国立公園の風景
014	HISTORY
	利尻礼文サロベツ国立公園50年の歩み
018	INTERVIEW_01 RISHIRI
	利尻山を守るとは？ 挑戦と葛藤の日々
024	INTERVIEW_02 REBUN
	レブナツモリソウが紡ぐ島の絆
030	INTERVIEW_03 SAROBETSU
	湿原と農業の共存を模索して
036	KEYWORD
	リーダーに聞く未来へのキーワード
040	REPORT
	未来に向かってアクション！
042	RECOMMEND
	暮らす人に聞く！ まちまちの魅力
048	EPILOGUE
	未来に向けて



日本最北の国立公園。北海道の北西部に位置し、利尻島と礼文島の約半分と稚内市から豊富町・幌延町へ続く海岸砂丘林とサロベツ原野が指定されている。

利尻

利尻島は外周約60キロの円錐形の火山島で、海岸からそびえ立つように見える利尻山は、標高1721メートルの独立峰。別名「利尻富士」とも呼ばれるその姿は、天候や季節によって刻々と変化し、自然の持つ「美」が多様で尊いものであることを私たちに感じさせてくれる。

山の中腹から山頂にかけては火山礫の浸食により、深い谷と鋭い尾根のコントラストが際立つ。こうした山のフォルムは数多くの登山者を魅了してきたが、人々の踏圧などで登山道沿いの侵食が進んでしまう結果となった。もろく崩れやすい山肌をどう守るのか。前例のない課題に人々は向かい、試行錯誤が続いている。



礼文

利尻島の北西約10キロに位置する礼文島。

隣り合う島同士であるが、その成り立ちや様相はまったく異なる。山が屹立し海に浮かぶように見える利尻島に対し、礼文島は東西約8キロ、南北約29キロと細長く低い丘が穏やかに連なっている。

別名「花の浮島」と呼ばれ、高山植生が海抜0メートルから出現しており、レブンアツモリソウやレブンキンバイソウといった固有の植物も豊富。「ここにしか咲かない花をいつか見てみたい」、そんな憧れを抱き、この島を訪れる人が後を絶たない。希少な花たちは環境の変化などさまざまな要因で生息数を減らしているものもあるが、種を絶やさないための取り組みも行われている。咲き誇る花々の裏には、花に寄り添い暮らす島の人々の姿がある。

2つの島の自然景観とは対照的に、果てしなく続くかのような地平線が広がるサロベツ原野。6000年ともいわれる時を経て、植物遺体が堆積した泥炭地の上に日本最大級の高層湿原が生まれた。開拓時代から、この土地を農地にしようとはさまざまな工夫を重ねてきたが、時代を経て自然保護という価値観が共有されるようになり、開発か自然保護かという議論が早くから重ねられてきた。そのプロセスは、自然というものの認識を深め、他者の思いを受け止め、地域の未来像を見据えるための大切な機会となった。

サロベツ



国立公園というと、その主役は手つかずの自然であると思われるかもしれない。しかし、その自然がいまここにある裏には人々の関わりがあることも見逃してはならない。国立公園に多くの人が訪れることによって、自然環境に負荷をかけることにつながるが、その負荷を軽減するのにもまた人の役割といえる。

50年の節目を迎え、本書では、自然とともに歩んできた人々にスポットを当てた。固有の植生の保護に取り組む人々や自然と人間との境界となる登山道の整備をする人々などが登場する。そして、今も昔も変わらず自然の恵みを暮らしに生かす地域の人々の姿がある。

利尻礼文 サロベツ国立公園 50年の歩み



最北の風景を守る 試行錯誤の歴史

国立公園に関する出来事

1950 (昭和25年)
利尻郡、礼文郡全域29580ヘクタールを利尻礼文道立自然公園に指定。

1959 (昭和34年)

稚内市の一部、豊富町の一部4407ヘクタールが道立自然公園に追加指定。
礼文島桃岩付近一帯の野生植物が北海道の天然記念物に指定。

1960

1962 (昭和37年)
北海道知事より厚生大臣へ国定公園指定の申出を行う。

1963 (昭和38年)
厚生省国立公園部の現地調査。

1965 (昭和40年)

利尻郡、礼文郡、稚内市及び豊富町の一部を利尻礼文国定公園に指定。

1968 (昭和43年)

利尻島のチシマザクラ自生地が北海道の天然記念物に指定。

1971 (昭和46年)

稚咲内海岸砂丘林が北海道の天然記念物に指定。
環境庁発足。

1974 (昭和49年)

9月20日、利尻礼文国定公園にサロベツ原野が追加され、利尻礼文サロベツ国立公園に指定。

1975 (昭和50年)

利尻礼文サロベツ国立公園管理員を配置。

1980 (昭和55年)

礼文島西海岸の国有林内からレブンアツモリソウが大量盗採。

1983 (昭和58年)

礼文島に高山植物保護対策協議会が設置され、レブンアツモリソウなどの対策を積極的に実施。

1986 (昭和61年)

利尻礼文サロベツ国立公園管理計画書策定。

利尻山鬼脇ルート通行禁止。

サロベツ湿原乾燥化対策、環境庁の委託を受けた北海道自然保護協会が、3年間の調査を終え報告と提言をまとめる。
礼文町高山植物培養センター完成。

1987 (昭和62年)

レブンアツモリソウ盗掘続く。監視体制を強化。
サロベツ原生花園自然教室ビジターセンター開館。



利尻礼文サロベツ国立公園が誕生したのは1974年。すでに1965年に利尻・礼文と稚内から豊富までの海岸線が国定公園に指定されており、そこにサロベツ原野が加わる形となった。国立公園として指定された背景には、当時サロベツ原野で進められていた開発計画があった。酪農に適した草地として土地を改良するのか、多様な生態系を有する湿原を保護するのか。議論が揺れる中、1971年に自然公園審議会で「サロベツ原野を公園区域に編入して、自然保護上格別の措置を講じることが必要」との答申がなされた。ここから保護区域はしっかりと守り、開発も両立させるといふ考えのもとに国立公園として指定された。

指定により環境保護への意識は高まったが、観光ブームなどによって多くの観光客が訪れ、こうした中で利尻

地域に関する出来事

1950 (昭和25年)
北海道開発法公布、北海道開発庁発足。

1957 (昭和32年)

稚内開発建設部サロベツ原野開発計画の樹立。

1960 (昭和35年)

稚内空港開港。

1962 (昭和37年)

利尻空港開港。

1967 (昭和42年)

サロベツ放水路完成。

1968 (昭和43年)

この頃、最果てブームで観光客増加。

1970 (昭和45年)

三井東亜化学が泥炭採掘工場を豊富町に設置。

1977 (昭和52年)

旧ソ連と米国が「200海里漁業水域」を設定。
北洋漁船は操業場所を失い、稚内経済は大きな打撃。

1978 (昭和53年)

礼文空港開港。

1982 (昭和57年)

道道稚内天塩線全線開通。

1983 (昭和58年)

大韓航空機墜撃事件が発生。

1984 (昭和59年)

利尻空港新ターミナルがオープン。

1987 (昭和62年)

東京⇄稚内直行便が就航。

1990

1989 (平成元年) 礼文町高山植物培養センターでレプンアツモリソウの人工培養による発芽に成功。利尻礼文サロベツ国立公園指定15周年に合わせ、浜勇知の海岸に展望休憩施設「こうほねの家」がオープン。幌延ビジターセンター開館。

1990 (平成2年) 礼文町高山植物園完成。

1991 (平成3年) サロベツ鳥獣保護区設定。

1993 (平成5年) 稚内市唯一の「コウホネ」の群落地となる「こうほね沼」の水位低下。存続の危機。

1994 (平成6年) レプンアツモリソウ特定国内希少野生動物植物種指定。

1995 (平成7年) 大型低気圧による大シケで激浪が浜勇知の防波堤役の砂丘を削り、展望休憩施設周辺や「こうほね沼」の浸食が深刻化。

1996 (平成8年) 浜勇知園地の「こうほね沼」が水枯れの危機。一時避難のためコウホネの移植などの保護対策が進められる。

2000 (平成12年) 利尻山で携帯トイレの無償配布開始。

利尻礼文サロベツ国立公園管理計画書改定。

2001 (平成13年) 環境省発足。

利尻礼文サロベツ国立公園パークボランティアの会設立。人工培養株のレプンアツモリソウが初めて開花。

2003 (平成15年) 国立公園第1次点検(「湿原、樹林帯の保護などを目的に、豊富、幌延両町の一部合わせて2944ヘクタールを新たに国立公園区域に編入)。

2004 (平成16年) サロベツ再生構想がとりまとめられる。

2005 (平成17年) 上サロベツ自然再生全体構想策定の具体化に向け、上サロベツ自然再生協議会が発足。

サロベツ原野ラムサール条約湿地登録。

2007 (平成19年) 海岸砂丘再生事業の一環で、稚内内砂丘林に「ドングリ」を植栽。

利尻山登山道等維持管理連絡協議会設立。

利尻礼文サロベツ国立公園管理計画書改定。

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワークの設立。利尻山登山道の登山道を整備。

2005 (平成17年) 上サロベツ自然再生全体構想策定の具体化に向け、上サロベツ自然再生協議会が発足。

サロベツ原野ラムサール条約湿地登録。

2007 (平成19年) 海岸砂丘再生事業の一環で、稚内内砂丘林に「ドングリ」を植栽。

利尻山登山道等維持管理連絡協議会設立。

利尻礼文サロベツ国立公園管理計画書改定。

2011 (平成23年) サロベツ湿原センター開館。

2015 (平成27年) 上サロベツ自然再生事業の取り組みにより、約40年前に消滅した落合沼が復活。エントミヨなど小魚の生息を確認。

2021 (令和3年) 国立公園第2次点検(礼文島のトド島北部の海域、利尻島の南浜湿原等を新たに公園区域に編入)。

2022 (令和4年) 礼文島桃岩一帯の高山植物群落を天然記念物に指定。

2024 (令和6年) 利尻礼文サロベツ国立公園が指定50周年を迎える。

2020

2010

2000



1989 (平成元年) 天皇・皇后両陛下が、豊富町のサロベツ原生花園を「視察」。

JR北海道の天北線が廃止。

1990 (平成2年) 東利尻町が利尻富士町に町名変更。

1993 (平成5年) 北海道南西沖地震が発生し、豊富町稚内でも漁船に被害。利尻〜小樽間のフェリー航路が廃航。

1994 (平成6年) この頃、百名山ブームで利尻山の登山者が増加。

1995 (平成7年) 稚内〜コルソコフ間にサハリン定期航路が就航。離島観光ブームが再燃。

1998 (平成10年) 利尻島サイクリングロードオープン。

1999 (平成11年) 現在の利尻空港が開港。

2003 (平成15年) 道北離島航空路線協議会で利尻・礼文〜稚内線の運航休止が正式決定。

2004 (平成16年) 宗谷丘陵の周氷河地形が北海道遺産に選定される。

2007 (平成19年) 日本原子力研究開発機構の幌延深地層研究センターのPR施設ゆめ地創館がオープン。

2008 (平成20年) ハートランドフェリー(旧東日本海フェリー)の新ターミナル、稚内港国際フェリーターミナルが揃ってオープン。

2010 (平成22年) 宗谷支庁から宗谷総合振興局に改組され、幌延町が留萌管内から宗谷管内へ編入。

2011 (平成23年) 映画「北のカナリアたち」の撮影ロケが、利尻、礼文両島や稚内市、サロベツ原野などで行われる。

2012 (平成24年) JR稚内駅と一体となった複合施設「キタカラ」がオープン。

2013 (平成25年) 礼文町に、映画「北のカナリアたち」のロケ地を活用した「北のカナリアパーク」がオープン。

2014 (平成26年) 鷺泊港新フェリーターミナル「海の駅おしどり」がオープン。

2016 (平成28年) 礼文島の新桃岩トンネルが供用開始。

2017 (平成29年) 豊富町、サロベツ農事連絡会議、北海道開発局稚内開発建設部が公益社団法人農業農村工学会の平成29年度同工学会賞「上野賞」を受賞。

2018 (平成30年) 利尻島内で106年ぶりのヒゲマ出沒が確認。天皇、皇后両陛下が利尻島を「訪問」。オタマリ沼などを「視察」。北海道胆振東部地震が発生。この影響で道内全域が停電。

2020 (令和2年) 新型コロナウイルスの流行が世界的に広がる。

自然とともに歩む人々

利尻 利尻山を守るとは？ 挑戦と葛藤の日々

登山道整備をめぐるインタビュー



自然が自ら回復する力を
サポートしたい

岡田 伸也 Shinya Okada

1975年神奈川県生まれ。23歳のときに尾瀬で自然ガイドを始める。2006年から5年間アクティブレンジャーとして登山道整備に関わる。2012年、登山整備会社トレイルワークスを設立、代表を務める。



風倒木の処理。大木をチェーンソーでカットし道の脇へと移動させる。今年はシーズン雇用で2名のスタッフが本州からやってきた。



頂上直下にある3メートルスリットの整備。コルゲート管に火山礫であるスコリアをつめて土壌を固め、植物が根を張りやすい環境をつくる。

標高1721メートルの利尻山は日本海に

まるで浮かぶようにそびえる独立峰。登山ルートは鴛泊と沓形の2つがあり、それぞれ頂上まで6時間ほどの道のりだ。山頂に近づくと、足場が悪くなり火山礫であるスコリア層が露出して来る。この層は、手で触るだけでもろろく崩れてしまい、およそ30年前に起こった登山ブームの折、人々の踏圧や雨水の流水などによって大きく侵食が進んでしまった。こうした登山道の荒廃に対し島ではさまざまな対策を講じてきた。前例なき課題に向き合う人々の挑戦と葛藤の日々を追った。

手探りで進められた登山道整備

登山口からほど近い森でチェーンソーの音が響く。強風で木が倒れ、ふさがれてしまった登山道を復旧する作業が行われていた。「倒木をそのままにしておく、本来の道とは別のところを登山者が歩いてしまいがち。貴重な花が踏まれないように速やかに作業するようにしています」。

トレイルワークスの代表である岡田伸也さんが教えてくれた。この会社では風倒木の処理など利尻山の登山道整備をはじめ、植生調査やトレイルブースの維持管理など多様な業務を担っており、その中でもっとも困難を極めているのが頂上直下にある通称「3メートルスリット」部分の整備だ。山頂は火山礫であるスコリア層が露出し、登山道は人々の踏圧と流水で道がV字型に深くえぐれてしまった。

対策に乗り出したのは約20年前のこと。調

査検討が行われ、2006年に岡田さんが環境省の利尻地区アクティブレンジャーとなつて以降、本格的な整備が始まった。「着任した年、トイレ清掃のために島の人たちと山に登りました。その前日に60ミリの雨が降って、登山道は流水によって50センチの溝ができていた。そこで溝がこれ以上深くならないように、土嚢で流水を止める堰をつくりましたが、その3日後にまた大雨が降って。その堰によって道の脇の植物に土が流入してしまいました。よかれと思つた行為が植生を崩すことになった。生半可なことをやってはいけないと思いました」。

このエピソードによって大雪山でも取り入れられていた近自然工法に注目。登山道が水路となつて侵食が進む現象は各地で起こっている。対策のポイントが道の脇へと排水を促すこと。土壌環境を安定させる技術を学んだ。

「石や木を使って自然に似せた景観をつくるのが、この工法だと思われていますが、それよりも自然が自身の力で回復できるようにサポートすることがこの工法の特徴です」。

スコリア層の大規模な侵食への対策は前例がなかった。手探りの中、樹脂製の筒で土壌を固めてみたが強度的に課題が残った。岡田さんはあるとき海岸で、水道工事などに使われる巨大なパイプ、コルゲート管が漂着していたのを発見。「これだ！」と思わずに山頂に運んで実験したという。

「スコリア層は炊く前のお米のようにバラバラで、触れるだけで崩れてしまうので、スコリアを管に入れて拘束させ崩れを防いでいる

のです」。

3メートルスリットの全長は20メートル弱。長さ約1メートル、重さ11キロのコルゲート管を山頂まで担ぎ上げ作業が行われる。作業期間は山頂の雪が解けている4か月の間。いま5年が経過し、コルゲート管設置完了まであと一息のところまでたどり着いたという。

「山肌に残されたコルゲート管は、施工直後は異質な感じがします。しかし、こうやって崩れを止めると植物が芽を出し、生長とともにコルゲート管を覆い隠すようになります。やがて自然が自分の力で地面の崩れを抑えられるようになる。20年後くらいに、ここはグリーンスリットと呼ばれるようになるんじゃないかな」。

登山者からは「ありがとう」と声をかけられる一方で、「ボランティアですか？ 荷物（はりコプター）で運んでいるんですか？」と聞かれることも多いという。

「もしへりコプターで荷物を運べたら工法の選択肢が広がるでしょう。また人材を継続的に雇用できる経済的基盤があったら技術継承もできるはず。整備に理解を広げる活動にもっと力を入れていきたいですね」。

ベストな環境を求めればきりが無いが、できる限りのことをしようという岡田さんは重い荷物を担いで今日も山頂へと向かう。

「20歳から山に登り始めました。山が好きなのでその環境を守りたい。楽しませてもらっている山に恩返ししたいんです」。山に登り始めた日から気持ちはブレない。困難があっても道なき道を歩む覚悟がある。

黒川 健一 Kenichi Kurokawa

1948年北海道礼文町生まれ。高校卒業後、通信設備会社に就職し利尻島に配属される。1992年にペンション群林風(グリーンウインド)をオープン。仕事の傍ら1996年に利尻登山会を設立し代表を務める。



毎日、眺めていても飽きないね

関係者の思いを一つにする場になればと思います

僕にとって山は家や親という感覚



関 光徳 Mitsunori Seki

1971年北海道利尻島生まれ。18歳から役場に入職。現在は産業振興課課長。利尻山登山道等維持管理連絡協議会の事務局長を6年務めている。山に関わると同時に水産業の振興も担当。調査のために海に潜ることもある。

——写真右

熊谷 洋人 Hiroto Kumagai

1961年北海道利尻島生まれ。役場を退職後に再雇用で産業振興課商工観光係専門員となる。自然ガイドや環境省の自然公園指導員としても活動。ライフワークは標高444メートルのボン山の整備と山の景色や草花の撮影。

——写真左



コマドリプロジェクト応援バッジと手ぬぐい。コマドリは利尻町、利尻富士町の町の鳥にも指定されている。観光案内所や町の施設で販売されている。

利尻ルールを広めたい

登山道をいかに保全するのか。利尻町、利尻富士町、環境省、宗谷総合振興局、山岳会などからメンバーが集まり、2005年に利尻山登山道等維持管理連絡協議会が設立された。この協議会の事務局長を務めるのが利尻富士町産業振興課の関光徳さんだ。

「山のトイレ問題や崩落など課題が多く、それが協議会設立につながりました。」
登山道荒廃と同時にもう一つの課題が山のトイレ問題。1990年代半ばになると、避難小屋の周辺など特定のエリアに排泄物や多量のティッシュペーパーが見られるようになったという。対策として2000年に利尻町と利尻富士町は携帯トイレの無料配布を始め、翌年には携帯トイレブースを設置。その後、有料化したのが定着率は高く、携帯トイレの先進事例として全国的にも知られるようになった。

ほかに、スコリアの崩れを抑制するために「ストックにキャップをつける」「植生を守るために」「植物の上に座らない、踏み込まない」ことを注意喚起する「利尻ルール」を協議会で策定。登山者や旅行・宿泊業者などに周知を呼びかけた。さらには「困ったことを取り除く」にかけて「コマドリプロジェクト」を2014年からスタート。応援ピンバッジや手ぬぐいを販売し、その収益を山岳保全に活用する取り組みも行っているという。

「協議会は整備をする側と登山道の利用者側の意見を知る情報交換の機会です。関係者の思いを一つにできる場になればと思っています。」
登山者が整備に関心を向けるために

協議会の事務局に長年携わってきた熊谷洋人さんも登山者のマナー向上活動のために力を尽くしている。5年前から自然公園指導員として山のパトロールや救助活動も行っている。
「時折見られるのが、登山者が植生に踏み込む場面ですね。また、ストックにゴムキャップをつけるのをルール化しているのは全国的にも珍しいので、理解を得るのに時間がかかっていますね。」

このほか、頂上付近の登山道の補修に協力を呼びかける活動を2年前に協議会で始めたという。崩れ落ちたスコリアを詰めた土嚢を10分ほど登った資材置き場まで運搬する作業を登山者も手伝うようになった。
「予想以上の反響で理解の深まりを感じます。パトロールをしていると『整備してくれてありがとう、登りやすくなりました』と声をかけてくれる人も少なくありません。」

登山道の保全に登山者自身が関心を寄せることは何より重要。熊谷さんもボランティアで、利尻山の麓にあるボン山の整備を10年以上続けている。早朝、仕事前に山に登り、ゴミを拾ったり、伸びた枝を除けたりしているという。
「トレッキングをしていると自然に包まれてとても気持ちがいい。僕にとって山は家や親という感覚。だから放っておけないですよ。」

登山者に満足して帰ってもらいたい

「若い頃は都会に行きたいと思っていたけど、仕事で先輩に恵まれて、山もよかったから、ずっと住むことにしたんだよ。」

黒川健一さんは礼文出身。通信設備の企業に就職し利尻に配属され、その後32年前に島初のペンションを開いた。仕事の傍ら趣味で登山も楽しむ中で、1996年に仲間20名と利尻登山会を結成した。きっかけは山岳ガイドのバイオニア的存在である次田経雄さんからバックカントリースキーを山頂から実施したいというオファーがあったこと。会の仲間とルートの下調べや安全対策を検討した。

加えて自然を楽しみながら守っていくことと、林野庁などからの依頼を受けて登山道にある支障木の除去やササ刈りを実施。またリシリヒナゲシの保護や山岳救助活動にも加わった。活動を積極的に行っていった頃は、利尻山に多くの登山者が訪れていた時期。深田久弥の著書『日本百名山』が、1990年代にNHKの自然紀行番組として放映され登山ブームとなっていた。

「2、30人でツアー客が来て9合目から山頂まで人が数珠繋ぎになって、山頂から誰かが降りないと次の人が登れない状態が発生したりもしていました。」

頂上直下の登山道が次第に崩れ、迂回路がつけられたこともあったという。また登山道の侵食が進む様子も目の当たりにしてきた。何か打つ手はないのだろうか。黒川さんは仲間と同様の問題を抱えていた屋久島を訪ね、

その対策を視察したこともあった。アクティブレんジャーの岡田さんが開いた近自然工法の勉強会にも参加したという。

「スコリアの侵食が登山道の整備の中でも一番難しい部分。だから手付かずのまま時間が過ぎてしまったんだと思います。岡田さんたちの対策のおかげで本当に登りやすくなりました。地獄から天国になったように思いますね。」

ピーク時に比べ、登山者は年間8000人ほどと現在は落ち着きを見せている。山の荒廃を考えると好ましいが、ペンションを経営し、観光振興にも関わってきた黒川さんは、この状況をどのように捉えているのだろうか。
「満室が経営的にはいいけれど、お客さんに目がいかなくなるし満足度も下がる。ツアーよりも個人旅行が増え、旅のスタイルも変化しています。せつかく遠くから来ている人だから、のんびり過ごしてもらいたいね。」

ペンションのレストルームには大きな窓が広がっている。ここから30年以上、毎朝欠かさず利尻山を見つめてきた。取材の日、山頂は雲に隠れていたが、窓を見上げ「毎日、眺めていても飽きないね」と語り、黒川さんは目を細めた。



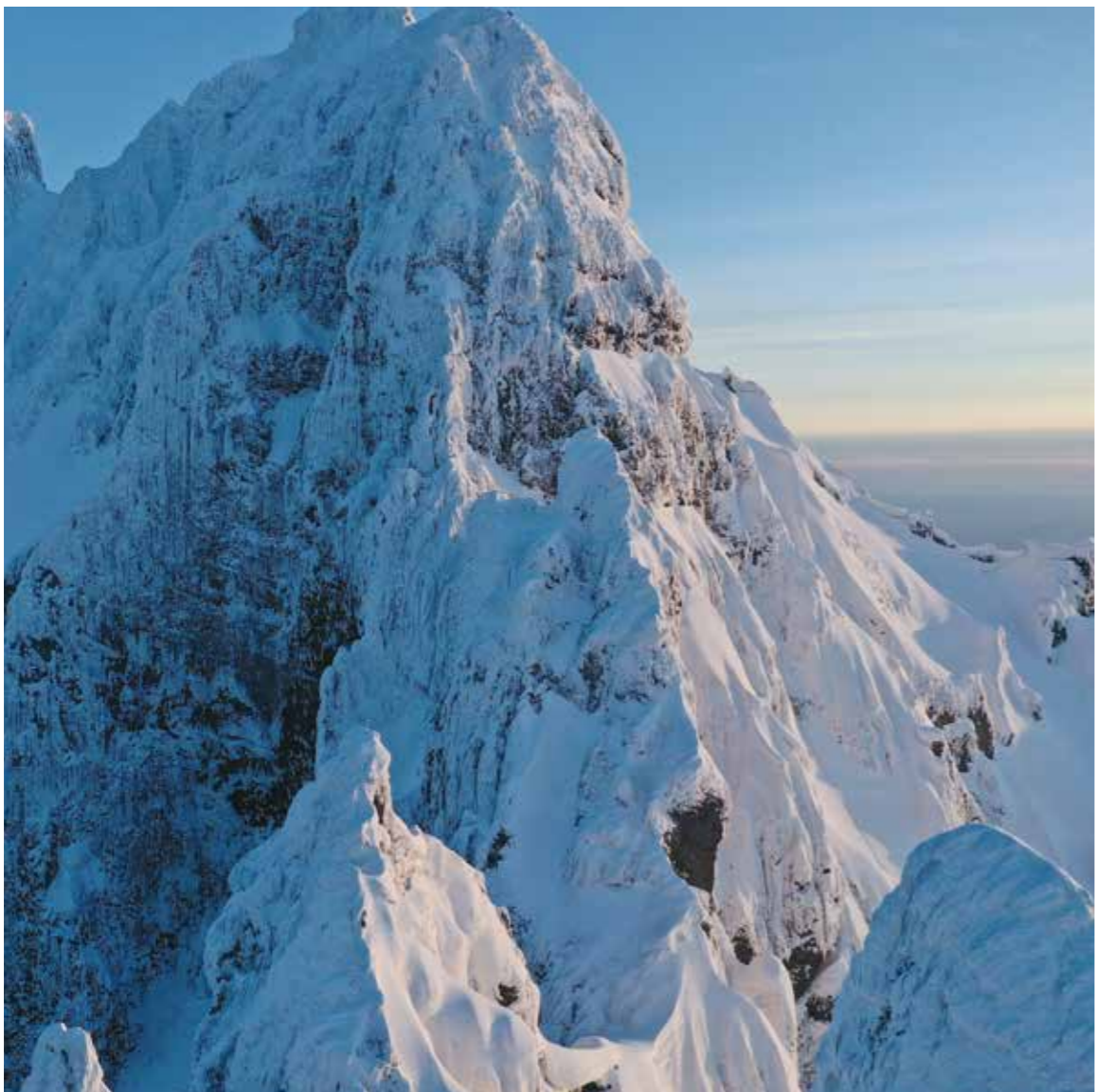
登山者で賑わっていた利尻山頂上付近の様子。足場の悪いスコリアの登山道を歩き、多くの人々が山頂を目指した。

心の中まで 全部見抜かれているような 神様みたいな存在



渡辺 敏哉 Toshiya Watanabe

1969年北海道利尻島生まれ。18歳で湘南(神奈川県)に移住しサーフィンを本格的に始める。2003年に利尻に戻り、その後ペンション「レラモシリ」オーナーとなる。利尻島と礼文島を専門にガイドする山岳ガイドとして、トレッキングやバックカントリースキー、シーカヤックなどのツアーを企画。



撮影＝渡辺敏哉

利尻の魅力をいかに伝えるか。「文章よりも写真、写真よりも動画がいいと思って」。ドローンがまだ浸透していない20年前から、いち早く導入し、ダイナミックな景色を撮り続けてきた。

唯一無二の圧倒的な存在

ここまで登山道の整備を実際に手掛ける人や推進する行政の立場の話聞いた。対して整備のあり方に疑問を投げかける意見もある。利尻礼文サロベツ一帯のガイドを行い、ペンション経営も行う渡辺敏哉さんは、利尻山登山道等維持管理連絡協議会のメンバーでもあり、もともと侵食が進んでいる通称「3メートルスリット」をコルゲート管によって嵩上げる工法について異議を唱えている。

「この20年、シーズン中は週4、5回ガイドで利尻山に登っています。侵食部分の工事の状況を見て整備を歓迎する声があると同時に、人工物があらわになった状況に『美しい利尻山が台無し』との意見もあります」。侵食や崩落は地質の特徴。崩れやすいからこそ特徴的な山のフォルムがつけられていると渡辺さんは考えている。

「自然には極力何かをプラスしてはいけなかつねづね思っています。植生回復を行う必要があるのならば、自然に還る素材を使つてほしい。将来的に侵食が進んでコルゲート管が露出し、それが沢に崩れ落ちる可能性もあるのではないか。未来の島民に迷惑をかけることになったらと心配しています」。

渡辺さんは侵食の進んだ現在の登山道を使い続けるよりも、斜度を緩やかにしたジグザグの迂回路をつくつてはどうかなど、経験を生かした提案も行ってきたという。あるがままの自然を受け入れたい。利尻の

魅力は人智を超えた圧倒的な存在であるという認識が芽生えたのは中学1年生のとき。生まれも育ちも利尻だった渡辺さんは、この年初めて遠足で礼文島を訪れたという。

「桃岩から知床まで歩く途中、元地灯台の手前くらいから西陽を浴びて光っている利尻山がパツと見えて。俺はなんてかっこいい島に住んでいるんだ！」って鳥肌が立ったんですよ」。

40年前の記憶は色褪せない。この感動を人々と共有したいと20年前からドローンを使った動画を制作してきた。

「あの時間にあの場所に行ったら絶景が見られる」、そんな風景のアーカイブが記憶の中にも無数にある。ダイナミックな自然が切り取られた動画には人工物は存在しない。

こうした映像での発信とともに、日々ガイドとして山を歩き、人々と自然の美を分かち合ってきた。

「冬のバックカントリースキーは半分が海外からの旅行者です。地球のパーツの中でもっとも大事な海も山も川も見える。利尻山は唯一無二の存在。みんな『アメージング!』と言ってくれますよ」。

インタビュウの最中、利尻の魅力を目を輝かせながら語ってくれたが、登山道の整備に話題が及ぶと、まるで自分の体が傷ついたかのような沈んだ表情へと変わった。思わず渡辺さんにとって利尻山とは何ですか？と質問をすると「子どもの頃から、心の中で全部見抜かれているような、神様みたいな存在。この山で僕は大きくなった」と答えてくれた。

議論の先にある未来像は？

取材を続ける中で、登山道の整備と一口にいても、そのビジョンはそれぞれ異なることがわかった。

「登山者一人が登りやすければいいという場合と、数万人が登る場合で整備の方法は変わる」と熊谷さんは語る。また、岡田さんは「安全のために歩きやすくするというよりも、侵食の要因の一つである踏圧を軽減するための対策として講じている」のだという。対して「北海道の山は登山道が整備されていない場所も多い。そういうルートをうまく導くのがガイドの役目」と渡辺さんは考えている。

協議会発足から約20年、さまざまな議論が繰り返されてきたことがうかがえる。異なる価値基準に接点を見出すのは難しい。その根底には自然に手を入れることは、守ることにつながるのか崩すことにつながるのかという大きな問いかけがあるように思えた。

しかし共通の意識もある。ウェブに独自の視点を生かした山の写真や動画を発信し、「利尻山に関心を持つ人がもっと増えてほしい」という思いをそれぞれに持っている。

視点は違っているけど、「一度登ってしまったら終わりということではなく、2度、3度と訪ねてほしい」という願いは一つだ。ファンが増えることは、登山道の現状に多くの人が関心を向けることにつながる。

こうした中から整備の議論がさらなる深まりを見せ、共通の未来像が開かれていくことを期待したい。

レブンアツモリソウが紡ぐ島の絆

保護増殖事業をめぐるインタビュー



礼文島だけに自生するランの一種「レブンアツモリソウ」を保護増殖するための事業が展開されている。この花は盗掘や環境変化によって一時は数を大きく減らし、その希少性から環境省レッドリスト2020で絶滅危惧ⅠB類に分類され、種の保存法に基づき特定国内希少野生動植物種にも指定されている。この事業の前身は、レブンアツモリソウが特定区域内において許可なしで採取できない高山植物に指定された1980年から始まり、町を中心に保護活動が続けられ、1996年には環境庁(当時)と林野庁によって保護増殖事業という形で進められることとなった。

ここでは、この事業に多角的に携わる人々にインタビューをし、保護の取り組みの歴史と島の暮らしとの関わりをたどっていく。

花を見る人々の意識が変化した50年

4月初旬、まだ雪の残る傾斜地で雪割りをする人物がいた。

「レブンアツモリソウが生えてくる前にササを刈っておきたいんです」。

雪を解かすといち早く伸びてくるササを抑えることで、花の生育環境を整えているのは竹田秀明さん。礼文出身で大学卒業後、礼文町役場に入職。礼文町教育委員会に出向となり、文化財保護という観点から、レブンアツモリソウを見守ってきた。退職後の現在も、フラワーレンジャーとして、この花を育む活動を続けている。

根本からすつぽりと株が抜かれており、当時の新聞には「札幌方面で1本1万円の高値」との見出しも。町は有刺鉄線の保護柵や監視小屋を設置。しかし盗掘は続き、1988年から開花時期に夜間も監視を行うようになり、竹田さんも何度も寝ずの番をしたという。

盗掘は負の歴史だったが、こうしたニュースによって島民にも貴重な花という認識が高まっていった。環境保護に関心を寄せる人々が増え、徐々に盗掘数も減っていった。やが

花との関わりは50年。その年月は利尻礼文サロベツ国立公園指定の歴史とちょうど重なる。入職当時、竹田さんは花の希少価値に気づいていなかったという。取材のときに見せてくれた資料の中に、幼少時代(昭和20年代)の記憶を島民から聞き取り調査した冊子があった。足の踏み場もないほどあちこちにレブンアツモリソウが生えていて、「お多福草」や「フクベ」と呼ばれ、花を摘んで遊んだ記

憶も。島民にとってはタンポポのように何気なく咲いていた花と竹田さん。そんな意識に変化があったのは、北海道の植物を研究していた谷口弘一さん(当時、北海道教育大学教授)が中心となって、レブンアツモリソウを調査し、保護の必要性を訴えた頃からという。加えて1980年に大規模な盗掘事件があったことも契機となったそうだ。「群生地が穴だらけになっていた。これは大変なことになったと思いました」。

世界にひとつだけの花
オンリーワンなんだよね



竹田秀明 Hideaki Takeda
1949年北海道礼文町生まれ。1974年礼文町役場に入職。2010年退職し、同年礼文町社会福祉協議会事務局長となる。2018年から礼文町のフラワーレンジャー業務を受託。

て有刺鉄線は木柵へと変えられた。竹田さんは役場を退職後もこの花と関わり、群生地の雪割りやササ刈りを行い、観光客にレブンアツモリソウの魅力を紹介し、保護のための募金も呼びかけている。「観光でいらした方の中には、10年前に来たときは花が咲いてなくて、今回ようやく見られて感激しましたって言ってくれる人も。こんな話を聞くと、中途半端なことをしてはダメだと思えますね。レブンアツモリソウは、ある歌の歌詞のように『世界にひとつだけの花』、オンリーワンなんだよね」。

全国各地から花を一目見たいと訪れる人々のために、なんとか開花時期が長く続いてほしいと竹田さんは願っている。「レブンアツモリソウを一言で表すとしたら？」と最後に投げかけると、何度も首をかしげながら言葉を探し、最後に人々と島との結びつきを生む「結」かなあとつぶやいた。



レブンアツモリソウの群生地には木道がつくられ木柵によって守られている。

過保護にしすぎないようにして たくましく育てほしい

村山 誠治

Seiji Murayama

1971年京都府京都市生まれ。大学で植物育種を学び、その後札幌で研究を続ける。2012年に礼文島へ移住。礼文町役場産業課に在籍。礼文島高山植物培養センターでレプンアツモリソウの培養研究も行う。



環境を守ることで 経済も守る

川村 長

Takeru Kawamura

1961年北海道礼文町生まれ。1980年礼文町役場に入職。水産、観光の振興などに携わり、2021年退職。同年より礼文島観光協会の事務局長を務める。



環境保護と経済と福祉が結びつく

人と島の結びつきを生むのがレプンアツモリソウ。そんな竹田さんの言葉と通じ合う結びつきを表した「礼文町リボンプロジェクト」がある。現在、礼文島観光協会の事務局長を務める川村長さんが、13年前に推進した。「とかちイエローリボンプロジェクト」*を参考に、環境と観光という一見相反するテーマをリボンという可視化できるもので結びつけようと考えました。

礼文島の高山植物をかたどったバッジを毎年制作。2011年、レプンアツモリソウをモチーフにした「アツモリリボン」から始まった。このプロジェクトが動き出した背景には、この時期に策定された礼文町生物多様性地域戦略「礼文島いきものつながりプロジェクト」があった。島の風景や豊かな食べ物はずべて生物多様性によって育まれたもの。そのつながりを途切れさせないためのアクションプランがつくられ、その一つがリボンプロジェクトだった。役場の中ではバッジ販売という新しい取り組みに難色を示す意見もあったが、予想を上回る販売数を記録し、息の長いプロ



フラワーレンジャーは募金を呼びかける活動も行っている。1000円以上募金をした人にリボンプロジェクトのバッジを手渡す。



種をつなぐ研究の長い道のり

「雪解けが早いと生育に影響が出る可能性もありますね」。

礼文町高山植物培養センターで、苗の様子をじっくりと見つめているのは村山誠治さんだ。以前であれば4月に入っても地面は雪に覆われていたそうだが、今年はずでに黒い土が現れ芽がところどころに現れていた。

レプンアツモリソウは、一時はその数を大きく減らしたものの、現在新しい群生地が見つかると一定の数が確認できている。しかし温暖化によって開花時期が早まっており、決して楽観的な状況ではないと村山さんは考えている。

種を未来に確実に残す対策として、40年ほど前からレプンアツモリソウを人工培養する研究が始まり、1986年にこのセンターが設立された。大学時代から植物の研究を行ってきた村山さんは、2012年に札幌から礼文島に移住し、培養研究を引き継いだ。

「ラン科の植物は発芽に必要な栄養を持たないため地中にある共生菌が必要になりますが、以前は無菌培養が主流でした。その後、自然界の法則に近い培養の研究が進み共生菌培養を行うようになりました」。

そのプロセスは驚くほど時間がかかる。シャーレに種を落とし共生菌と接触させて発芽を促し、その芽をポットに植える。ここまですべて2年以上かかる。その後、畑に植え直してから開花まで5〜6年。成長速度は非常に遅いが、20年以上も生き続けるという。

プロジェクトとなって現在にいたっている。

「経済を優先させることで環境を崩すのではなく、環境を守ることで経済も守るという仕組みを考えました。バッジ販売の収益金を環境活動団体の補助金にも充てています」。

川村さんが保護対策協議会に参加していた頃は、自然保護か活用かは、つねに議論的となっていたそう。レプンアツモリソウの生息域が減少し保護の意識が強まり、NPOと話し合いの中から「見せて守る」というキーワードが浮かび上がったという。

「観光から環境保護にアプローチする方法はいくつかあります。一つはトレイルコース以外の立入禁止区域をトレッキングができるように整備してはどうかという提案です。人の手を全く入れないことが環境保護だとする考えもありますが、場合によっては荒廃を招くことも。たくさんの人に美しい風景を楽しんでもらうことが環境整備につながるはず」。

このほか観光パンフレットで環境保護への寄付を呼びかけたり、フォトコンテストで交流人口を増やしたりと多彩な取り組みを行う。「礼文島民のフェリーの利用率は10パーセントほど。観光や漁業物運搬の利用があつて成り立っています。つまり観光産業によって経済が支えられ、最終的には島民の福祉の維持につながっています」。

川村さんはいまフェリーターミナルに併設されている観光案内所のオフィスで仕事をしている。礼文の玄関口で人々を迎え入れるその眼差しは、環境保護、経済活性、島民の福祉という包括的なビジョンを見据えている。

*十勝シーニックハイウェイと連携し、ルート内の遊休地や施設の敷地にひまわりを植え景観創出するプロジェクト。

「センターで働くようになって今年で12年。培養した株のうち半分くらいは失敗してしまいました。培養室から外に出す段階で枯れてしまうものも多くて。最初に畑に移してうまく成長してくれたものが、いまようやく花を咲かせ始めましたね」。

試行錯誤を経てほぼ技術は確立されたそう。今後は100株ほどの培養株を毎年コンスタントに育て、まずはセンターでたくさんレプンアツモリソウを見てもらいたいという。

「培養はいくらでも手をかけることはできますが、一番の目的は自然の中で育つことです。ですから過保護にしすぎないようにして、たくましく育ててほしいと思っています」。

礼文町高山植物培養センターでは、レプンアツモリソウとともにこの島にしか咲かない固有種をはじめとする約50種類、1万本もの高山植物を育てている。

「礼文は小さな島ですが、固有種を含む多様な花が咲くところが魅力」と村山さん。時代が変わっても花が織りなす風景が絶えることがないようにと、日々、植物と向き合い続けている。



培養されているレプンアツモリソウ。種が発芽し幼植物体(プロトコム)が形成されている。播種から1年。変化はわずかだ。

妻のほほえみを 思い出す花です



宮本 誠一郎
Seichirou Miyamoto

1960年千葉県柏市生まれ。1992年より礼文島在住。自然写真家。レブングル写真事務所主宰。レブングル自然館代表。著書に「新版 礼文島の鳥花の道」「新版 利尻島の鳥花の道」「サロベツ 花原野の道」のシリーズ3部作（いずれも 柳田と共著、北海道新聞社）などがある。

ふるさとが残ることを願って

30年以上、夜が開けてまもない山で高山植物を見つめ、ファイナダーにおさめてきた写真家がいる。宮本誠一郎さんは32歳のとき、妻であり同じ写真家でもある柳田美野里さんと生まれたばかりの長女とともに東京から礼文島へ移住した。きっかけは自転車で日本を縦断した旅。沖縄の西表島から出発し終着点は最北の礼文島。このとき同じく旅人だった柳田さんと島で知り合い、その後結婚。活気ある島の様子に触れたことで礼文行きを決意したという。

「礼文では写真家として生計を立てたいと考えていて、5年以内に1冊自分の本を出版するという目標を立てました」。

当時、島をガイドした本はあったが、トレッキングコースや花の紹介は的確ではない部分も少なくなかった。著名な写真家が撮影した写真もあったが、数日の滞在で撮ったものがほとんど。そんな中で、この島で暮らし、足繁く山に通い花や風景の写真を夫婦で撮りためた。気がつけば3年後に初めての本「礼文



宮本さんと柳田さんの共著。四季折々の花の写真とともに、トレッキングコースのガイドや地形、植物の歴史などが丁寧に解説されている。

花の鳥花の道』を上梓することに。その後、利尻やサロベツ原野に関する本も出版。刊行数は10冊を超えた。

本の刊行により観光パンフレットへの写真掲載も増え、自然ガイドの依頼も舞い込むようになり、忙しい日々が続いたという。

「ちょうど全国的に自然観察を楽しむ人々が増えた時期と重なったことが大きかったですね」。

礼文島が観光客の熱い視線を集めるようになった背景には夫妻の著書の存在も大きい。希少な花がある島だという認識が広まる中で、ある出来事が心を動かした。

「毎年楽しみに撮影していたレプンアツモリソウの株が盗掘にあってしまっただけです」。

仕事の傍ら環境省の自然公園指導員となり、撮影をしながら山で監視を行うようになった。その後、礼文島自然クラブを立ち上げ、国有林のバトリールや植林事業、外来種除去も実施。やがてレプンアツモリソウの保護増殖事業にも携わり、環境整備も手がけた。

「自然ガイドを引き受けたのは、観光客が写真を撮ろうとして山の中に分け入らないようにして欲しかったからです。また、歩道でないところを多くの人々が歩いて別の道ができてしまうといった行為が出てきたので、歩道以外のところにロープを張る活動を礼文島自然クラブの仲間と行ったこともありました」。

島がいつまでも変わらぬ姿であってほしいという願いは、自身の「ふるさとを失った」体験からくるという。幼少期を過ごした千葉県県柏市は開発が進み、原風景となった森もいまはない。



撮影＝柳田美野里

柳田美野里さんが撮影したレプンアツモリソウ。その横にサクラソウモドキが写っている。この写真が収録されている柳田さんの著書「キャンサーギフト」（北海道新聞社）は亡くなる直前に刊行された。

「最北の島であれば、ずっと原風景が残るのではないかと思ったのが移住の理由の一つ。娘にふるさとを残してやりたいと思って」。

写真は礼文の魅力を発信する媒体であると同時に風景をアーカイブする役割もある。人為的に環境が変化してしまったり、元の状態に戻すための指針にもなる。

インタビュ어의最後に「宮本さんにとってレプンアツモリソウとは？」と投げかけると、少し間を置いて「妻のほほえみです」と答え

てくれた。白くふっくらとした花は人の表情に確かに似ている。柳田さんは3年前に病氣のために亡くなった。宮本さんの写真事務所には、柳田さんの撮影した花の写真が壁一面に飾られ、その一枚にはレプンアツモリソウとサクラソウモドキが仲良く並んだ、白とピンクのコントラストが美しい写真があった。

50年前にあった原風景を求めて

50年前、レプンアツモリソウは何気ない日常の花という認識だったと礼文出身の竹田さんは語る。同じく礼文出身の川村さんによると、ササ地は現在ほど拡大していなかったと振り返る。川村さんが策定に参加した礼文町生物多様性地域戦略にも、ササの刈り払いによって植物群落を再生する取り組みの必要性が指摘されている。

村山さんも気持ちは同じだ。地球温暖化がいまほど深刻ではなかった50年前であれば、高山植物を未来につなぐ試みはもっと容易であっただろう。しかし同時に、希少種の減少は、人為的な開発の影響よりも、温暖化に加え「植生の遷移という自然の結果」ではないかと考えている。

50年前の風景を取り戻したいという思いは、宮本さんが守りたいと語った「原風景」とも重なる。心の奥底にある、懐かしい記憶を蘇らせる風景にもう一度出会いたいと思う意識は、人に備わった普遍的なものなのかもしれない。

過去を振り返ることで見える島の未来の姿とは？ 問いかけながら手探りで歩む道に終わりはない。



左が農地、右が湿原で、その間に緩衝帯がある。農地と湿原が隣接している、およそ10キロの区間に緩衝帯が設置された。

「湿原と農地で土地を半々ずつ出さないので、100パーセント農家側が提供する」という方針に抵抗する意見がありました。これから酪農を拡大していくという意気込みのある農家が多かったし、受け継いできた農地が失うことに納得できなかったんですね。

湿原の保全とともに土地改良事業が同時に実施される計画があった。豊富な牛乳はコンビニエンスストアを中心に全国に知られたブランド。安定供給のために優良な牧草地をつくるこの計画は欠かせない。同時に自然も守らなければならぬ。この事業に参加する128戸の農家に山本さんは緩衝帯への農地提供を呼びかけた。

「専門家を招いて勉強会を行いました。緩衝帯を挟んで農地は地下水位を下げ、湿原は地下水位を上げる工法について理解を少しずつ深めてもらいました。」



山本牧場の敷地には、妻の由紀子さんが描いたサロベツの自然を愛するメッセージが込められた壁画が各所にある。現在、180頭の乳牛を育て、自然と調和した酪農経営を目指している。

かつては14600ヘクタールもの広さがあったサロベツ湿原は、昭和40年代以降の大規模な開発などによって、その範囲が急速に減少し、半分以下にまでなっている。開発が進むと同時に湿原を保全する動きも始まり、1974年にこのエリアが利尻礼文サロベツ国立公園として指定されたことを契機に、自然保護とのバランスにより多くの目が向けられるようになった。湿原の周辺では大規模な酪農が展開されていた。湿原と農業とがせめぎ合う関係の中で、環境を守り人々の暮らしを守るための模索が続けられてきた。

故郷の風景を守るのは他ならぬ自分たち

「親の世代にしてみれば湿原は不毛地帯。まだ馬を使っていた時代で、脚がぬかるんで動けなくなるくらいだったんですよ。そこを手で掘って暗渠を入れて水をぬいて。そうやって少しずつ草地を広げていった経緯があった。」

豊富町で牧場を営む山本寿昭さんはそう振り返る。先代の農地を受け継ぎ酪農を経営の柱としたのは1975年。そこから約30年、農地開発事業により経営規模の拡大が進んでい

た。農地には適さなかった湿原と山本さんが向き合うこととなったのは2004年のことだ。

「農業の生産を維持し、住む人の暮らしを守り、自然を守る。この3本を軸として自然再生事業が始まったんだよね。」

専門家や地域住民などの個人や団体、北海道開発局や環境省などの行政機関、農業協同組合などの関係機関が集まり上サロベツ自然再生協議会を設立。山本さんは農家側の代表としてメンバーに加わった。この協議会で議論されたのは、農地と湿原とを明確に分け、その間に緩衝帯を設けること。その幅は25メートルとされ、農家側へ土地の提供が求められた。

もつとも難しかったのは緩衝帯のために農地を提供することになる13戸の農家との折衝。「自分たちだけが犠牲になればいいのか？」という意見に対し、山本さんは「とも保証」という考えを提示した。

「全農家で土地代を按分するという方法です。緩衝帯へ農地を提供する負担を分かち合うことで全員が当事者となればと思います。」

山本さんは一人一人と話し合い、希望を吸い上げた。「自然を守るためにはどうしたらいいか聞く耳を持ち、我々からも提案をしなぐちゃならない」と粘り強く声をかけた。

「膝を詰めて話せばいつかはわかり合えるもんだよ。」

3年の調整を経て話はまとまった。酪農も湿原も地域の誇り。故郷の風景を守るのは他ならぬ自分たち。全員が当事者意識を持ったことで、自然再生に対する意識が高まったと山本さんは語る。また、この事業は冠水などの被害から人々を守る対策ともなっている。

「孫の代になって、じいちゃんたちが喧嘩しながらも力を尽くしたことで、湿原が守られているんだぞって語り継がれるのが夢ですね。」

INTERVIEW 03 サロベツ

湿原と農業の共存を模索して

上サロベツ自然再生事業をめぐるインタビュー

膝を詰めて話せば
いつかはわかり合えるもんだよ



山本寿昭 Toshiaki Yamamoto
1957年北海道豊富町生まれ。先代の農地を受け継ぎ、山本牧場を開く。サロベツ農事連絡会議議長、上サロベツ自然再生協議会にも参加し、農家側の取りまとめを行う。新規就農者を積極的に受け入れ、次世代の育成にも務めている。

失われた湿原を取り戻すために

上サロベツ自然再生事業がスタートして約20年。農地の土地改良と湿原との間に緩衝帯を設ける整備は一区切りを迎え、現在はその維持管理とモニタリング調査が続けられている。

「緩衝帯の整備は、環境保全と農業振興を両立させる取り組みのモデルになる事業として、高く評価されています」。

豊富町商工観光課に在籍し、上サロベツ自然再生協議会運営事務局を担当する清水日出晃さんは語る。2017年にこの取り組みは農業農村工学会賞「上野賞」を受賞した。

この協議会では、緩衝帯の整備に加え、湿原の地下水位の低下や乾燥化、地盤沈下といったさまざまな課題への対策を講じてきた。例えば60年以上前に農地開拓のためにつくられたサロベツ川放水路には、積載された泥炭の水分を抜くための水抜き水路が多数あり、これが湿原の乾燥化につながっていた。そのため環境省の事業として、水抜き水路の埋め戻しを実施。この事業を通じて湿原が回復へと向かい、消失していた落合沼も復活し、水鳥や魚類の生息地となった。また1970年から泥炭を採掘し土壌改良剤を製造するための工場があったが、この跡地に種子マットを敷いて植物の生育を助ける取り組みも行われている。

「開発の歴史を見直し自然を再生させる。ハード面での対策とともにソフト面も重要だと考えています」。

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワークを中心として、自然再生普及活動を行ってきた。

た。年に数回、イベントを開催しており、今年も利尻礼文サロベツ国立公園の指定50周年という記念の年にあたることから、無料ガイドツアーや記念品の配布、クイズラリーといったより充実したコンテンツを準備して実施したという。

「50周年を機に隣接する幌延町をはじめとする関係自治体との連携を強化し、自然保護との均衡を図りながら、地域産業や観光の振興と発展につなげていきたいですね」。



泥炭採掘跡地に種子マットを敷く。マットをかけることで植物の種子が定着しやすい環境をつくり発芽を促す。



水抜き水路の埋め戻しにより落合沼に水が戻ってきた。湿原も徐々に回復し、オオヒシクイなどの水鳥の姿も見られるようになった。

一見何もないところから何かを探す、上級者向けの場所



疋田 英子 Hideko Hikita

1943年北海道稚内市生まれ。1989年から利尻礼文サロベツ国立公園のパークボランティアとして活動し、2019年に自然環境功労者環境大臣賞を受賞。2020年『涯に咲く』(ナチュラリー)を出版。現在、続編の出版に向けて準備中。

涯に咲く花を見守って

「サロベツは一見何もないところから何かを探す、上級者向けの場所なんですよ」。

疋田英子さんは35年間、利尻礼文サロベツ国立公園のパークボランティアとして活動し、また自然体験会の開催や自然ガイドを通して動植物の魅力を人々に伝えてきた。6月下旬、エゾカンゾウが咲くと原野一面がオレンジ色に染まるが、それ以外のシーズンは控えめに咲く花が多い。疋田さんは望遠鏡を用意して、木道からはるか遠くに咲いているタチギボウシの群生を見せたり、わずか2ミリほどの花をつけるガンコウランを虫眼鏡で観察させたり。独自の観察会を仲間とともに開いてきた。

花はいつも身近にあった。茎に螺旋を描くように連なってピンクの花を咲かせるネジバナを妹たちと競って集めたことがあるという。結婚後は山菜取りで出かけるくらいしか野山との関わりはなかったが、45歳の頃、花の名前を図鑑で調べ、それを撮影するようになった。豊富町の介護福祉施設に義母が入所することになり、週3回、パート帰りに片道約40分車を走らせ施設に通ったことがきっかけとなった。

「息子からカメラをもらって、行き帰りで花を撮影するようになりました。花にとまっている鳥もよく見ていたのでバードウォッチングも始めて。花と鳥は切り離せないですよ」。自然観察を始めて国立公園内で株の盗掘が相次いでいることを知った。花を持って帰る

地域産業や観光の振興と発展につなげていきたい



清水 日出晃 Hideaki Shimizu

1969年北海道猿払村生まれ。1990年に豊富町役場に入職。2024年、商工観光課課長となり、上サロベツ自然再生協議会の運営事務局を担当。豊富町に住み始め、サロベツ湿原がエゾカンゾウで一面に彩られる風景を見て感動したことをいまも思い出すという。

うとする人に注意を促したいとパークボランティアとして活動を始めた。以来、国立公園の清掃や外来種駆除のほか、エゾタンポポの生息数や野鳥の飛来状況の調査も行うようになった。

「観察するだけじゃなくて毎年カウントしていこうと。エゾタンポポはエゾシカの採食の影響もあって、本当に少なくなってしまう。どうやったら守ることができると関係機関と一緒に考えているところです」。

サロベツはもちろん、利尻、礼文、そして猿払まで。どの時期にどの花が咲くのか、それぞれ植生の異なるエリアに足繁く通い、知らない植物があればすぐに調べ、ときには研究者にも意見を聞く。こうして培った花に関する知識をベースにしつつ、自身の記憶や心の機微を織り込んだ俳句とエッセイ、撮りためた写真を収録した著書『涯に咲く』を2020年に出版した。

この本の巻頭の寄稿文で、疋田さんは「北の花守り」であると書かれている。長年参加していた俳句の会を主宰する粥川青猿さんの言葉だ。

「若い人にも外来種を見分ける目を持ってほしいと思っています。在来種を守るために駆除を一緒にしてもらえたらうれしいね」。

どの芽が外来種なのか。小さなうちは見分けがつかず、頼りになるのは疋田さんの眼だ。今年80歳となる疋田さんは、今日も大きなレンズを抱え野山を歩き、植物を見守る。

子どもたちへ6000年の自然をつなげていきたい



山形 雅弘 Masahiro Yamagata

1992年北海道名寄市生まれ。2011年豊富町役場に入職。現在、建設課上下水道係の係長を務める。高校時代より環境省のパークレンジャーとして活動するなど自然保護活動に従事。現在、エコモ★サポーターの代表として、環境活動を行う個人や団体をつなげる取り組みも行う。

©新潟・サンライズ

子どもたちには いまある自然を 覚えておいてもらいたい



千葉 久 Hisashi Chiba

1960年北海道豊富町生まれ。漁業協同組合で働き、その後店舗経営を手がける。1999年から豊富町の議員として活動し現在7期目。2021年からNPO法人サロベツ・エコ・ネットワークの代表理事に就任。ハンターとしても活動し、地元のエソシカ加工工場の経営にも携わる。

地域貢献ができるNPOを目指して

豊富町で生まれ育ち、サロベツ湿原の移り変わりを見つけ続けてきた人がいる。ハンターであり、会社経営者であり、豊富町の町議会議員でもある。多彩な顔を持つ千葉久さんは、3年前からNPO法人サロベツ・エコ・ネットワークの代表理事も務めている。

このNPOは2004年に設立され、サロベツ湿原センターの管理運営をはじめ、希少な動植物の調査と保全、稚咲内砂丘林の再生、稚咲内海岸やサロベツ川・ベンケ沼の清掃活動など、さまざまな環境保護活動を行っている。

こうした活動の裏でこれまで経済的基盤が安定せず、人材が定着しないなどの問題があったという。千葉さんは、組織運営に経営的視点を入れて雇用の安定を確保するとともに地域との接点を持つよう促した。

「大切なのは動植物の専門性を極めるだけでなく地域貢献です。スタッフには消防団や商工会に参加して顔を覚えてもらうことから始めようと呼びかけました」。

環境保護団体という開発のすべてに反対する組織であると地域住民に思われることもあるそうだが、そうした主義主張を超えて、重要なのは人と人とのつながりだと説く。

「湿原センターでは、地域の子どもを対象にした自然体験プログラムも開催しています。子どもたちから『あのお兄さん、お姉さんに会いたい』っていわれるようになってもらいたいですね」。

保護活動の基盤をつくるために、NPOでは次世代への教育に力を入れている。

「いまある自然を覚えておいてもらいたい。大人になって環境が変わってしまったとき、子どもの頃に自然に触れた体験があれば、元に戻そうという思いを持つんじゃないかと」。多忙な中で、年間300日エソシカの駆除を行い、生態系のバランスを保つ取り組みも実行している。その中で温暖化による気候の変化を肌で感じるという。

「最近、エソシカが湿原を縦横無尽に歩くようになっていきます。湿地の乾燥化が進んでいるんだらうね。角の落ちる時期も以前より1か月以上早くなっていますね」。

地球規模の現象に立ち向かうことは難しいが、NPOと地域とをつなげるパイプ役として魅力ある組織づくりのための改革を続け、次世代にバトンをつないでいく手立てを探っている。



サロベツ・エコ・ネットワークでは四季折々の自然ガイドなどさまざまな体験型プログラムを実施。木道で見られる花の開花情報なども細かく発信するなど、人々が興味を持つきっかけづくりを行う。

町おこし×アニメから生まれる未来

環境保護の取り組みを次世代へ。そのパトンを受け継ぎ活動するのが、現在31歳の山形雅弘さんだ。交換した名刺の情報量に驚く。豊富町役場の建設課上下水道係とエコモ★サポーター代表という肩書きのほか、ゲームの実況中継サイトやAIを利用してゲームを攻略するbotの開発情報のアカウントといったQRコードで埋め尽くされている。

「何がきっかけでつながりが生まれるかわからないので」と山形さん。ゲーム攻略の世界では1万人のネットワークを持つ。

名寄市で生まれ9歳で豊富町へ引っ越し、湿原をフィールドとする村元自然学校に入会。動植物に触れた経験から、高校時代には

自然保護ボランティアとして活動した。

卒業後は豊富町役場に入職。水道係として10年以上仕事をするうちにマンホールにアニメキャラクター「ポケモン」や「ガンダム」の絵柄を入れるプロジェクトへの参加を思い立った。

「以前から親しんでいたゲームやアニメ文化が地方にはなく、こうしたコンテンツで町おこしをしたいという思いがありました」。

「ガンダムマンホール」は稚内市と天塩町に連携を呼びかけた。また、道北とガンダムとを関連づけるストーリーとして、『機動戦士ガンダム』に登場する「Nフィールド」という空間を、果てしなく広がるサロベツ湿原や牧草地帯のイメージと重ね合わせるなどの工夫をし、説得力のあるプロジェクトとして注目を集めた。自然保護活動も入職当時から継続し、サロ

ベツ・エコモ★プロジェクトにボランティアで関わってきた。エコモ★はエコロジート牛の鳴き声を掛け合わせた造語。湿原と農業の共生がテーマである上サロベツ自然協議会の再生普及部会として2008年からエコモ★サポーターという名で取り組みがスタート。この代表に2021年に就任した。

「私たちの役割は、サロベツに関わる人材を発掘して、その活動を紹介し、それぞれがつながり合うきっかけをつくることです」。

毎年、エコモ★Dayを実施。保護活動のパネル展示や消防車、大型遊具も設置し、親子で楽しめるイベントを企画。

このほか自然保護活動を役場の仕事とも結びつけ、「ガンダムマンホール」にサロベツ湿原の風景を組み込んだり、エゾカンゾウをモチーフにしたマンホールをつくったりとコレクター心をくすぐるアイテムも出している。

「自然保護を意識していない人でも、興味のあるアイテムとつなげることで、関心を持ってもらえるのではないかと考えています」。

水道、自然保護、アニメやゲームなどまったく別の領域ではあるが、場面場面で人と出会い、それが他の活動と結びついて助けられることが多いという。思いがけない領域同士がつながり合い、さらなる化学変化が生まれていく。そんな山形さんの活動に今後も目が離せない。

人と人の新たなつながりを生むために

サロベツ湿原が時代とともに変化した背景には、人々の意識が大きく影響していた。自

然再生事業は、開発か保護かという対立を超えて、人々の共通認識をつくるという難しい課題に向き合った。緩衝帯の整備に一区切りついたいま、農家の代表を務めた山本さんは、緩衝帯によって湿原がどのように守られているのか、その状況を農家側に継続的に報告する取り組みが必要だと考えている。

自然の状況に つねに意識を働かせることの大切さは、疋田さんの長年の活動からも感じられる。観察を続ける中で、花々の変化にいち早く気づき、そこから何らかの対策を講じるきっかけが生まれることもある。

二人のように自然保護に高い関心を寄せる人を今後さらに増やしていくために、何ができるだろうか。上サロベツ自然再生協議会やサロベツ・エコ・ネットワークでは、数々の教育普及活動を行ってきた。しかし少子化の中で子どもへの参加が減る傾向にあるという。

「いまこそ人と人とのつながり、信頼関係を培うことが大切」であると千葉さんは語る。

人と人とのつながりを生む方法に新風を吹き込んだのは、豊富町役場の山形さんだ。アニメのコンテンツを生かし、町の存在を全国に知らしめることに成功した。人気のキャラクターをPRに利用する事例は数多あるが、自身の「好き」をコアに掘り下げ、前例にとられないアイデアの数々で、注目を集めた取り組みとなった。これは町おこしの事例であって、自然保護活動とは異なる点もあるかもしれないが、人々を結びつける大きなヒントとなる取り組みであることは確かだ。次世代的な挑戦の先に希望の光を見た思いがした。

50年後の未来への キーワード

利尻礼文サロベツ国立公園は1市5町にまたがり、それぞれの地域が連携を取りながら、自然環境の保護に取り組んでいる。ここでは構成する地域の市長・町長と、北海道の北端部の10市町村を所管する宗谷総合振興局長による未来へのメッセージと、今後の取り組みに欠かせないキーワードを紹介する。



彩

彩りあふれる自然環境をつないでいくために



宗谷総合振興局長
清水目剛

利尻礼文サロベツ国立公園が指定50周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

利尻礼文サロベツ国立公園は、公園のシンボルである利尻山、礼文島に咲く貴重な高山植物群、野鳥たちが立ち寄るサロベツ原野といった日本最北ならではの気候や地形がもたらす自然景観、希少な動植物が息づく生態系等を有し、私たちの暮らしや産業にさまざまな恩恵をもたらすとともに、国内外から訪れる多くの旅行者を魅了し続けており、まさに世界に誇れる宝であると改めて感じております。

一方、昨今は登山道の崩落や希少植物の盗掘、湿地の乾燥化などのいくつもの困難が生じ、その度に人知れぬご苦労と創意工夫で、今日まで美しい自然を残してこられたことは、ひとえにみなさまのご尽力の賜物と感謝を申し上げます。次第であります。

この先の50年に向け、日本を代表する美しい自然環境をしっかりと未来に引き継ぐとともに、それらと調和の取れた地域の活性化につながるよう、みなさまと力を合わせて取り組んでまいりますので、今後ともご支援とご協力をお願いいたします。

活



持続可能な利活用の
推進を目指して

稚内市長
工藤広

利尻礼文サロベツ国立公園が指定50周年を迎え、ここに記念誌が発刊されますことは、誠に感慨深いことであり、心からお祝い申し上げます。

これまでの半世紀にわたり、1市5町にまたがる雄大な自然を守るため、環境保全や啓蒙普及活動など、さまざまな分野でご尽力を賜りました関係者のみなさま方には、改めて感謝を申し上げますとともに、衷心より敬意を表します。

利尻礼文サロベツ国立公園は、洋上の独立峰「利尻山」を象徴として、四季折々の変化がもたらす多様な景観と、希少な動植物が特徴的な日本最北の国立公

園となります。

本市といたしましては、この美しく、貴重な自然を損なうことなく、次の世代に引き継いでいくため、持続可能な国立公園の利活用を推進することで、世界中から多くの人が訪れる、活力あるまちづくりを進めていきたいと考えております。

この先の50年も、かけがえのない財産として、地域住民に愛され、そして、来訪者を魅了する国立公園であり続けられるよう、関係するみなさまと連携を図りながら、各種取り組みを実施してまいりますので、今後とも変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

耀



地域が一体となって
輝く未来へ

利尻町長
上遠野浩志

令和6年9月20日に利尻礼文サロベツ国立公園が指定から50周年を迎えられたことは、関係市町としてこの上ない喜びであり、心からお祝い申し上げます。

昭和49年に国立公園として指定された時の思いが昨日のことのように蘇ってきます。当時、日本最北の国立公園として価値を認めていただいたことは大きな誇りであり、このことで地域の発展を期待し、胸躍らせました。以来、利尻町は国立公園の町として、今日までの歩みを続けてきたと言っても過言ではありません。

利尻町は、多くの高山植物が咲き、野鳥がさえずる自然

豊かな漁業と観光のまちです。秀峰・利尻山は、本国立公園のシンボルとなっております。多くの登山客が山行を楽しんでおります。

一方、昨今では、登山道の維持管理等の課題が山積しており、解決のために関係機関が一体となって考え、協力していかなければなりません。

利尻礼文サロベツ国立公園指定50周年を契機に、地域間の連携のもとに、生態系の保全と利活用の調和に努めながら、自然の恩恵を活かした魅力ある地域づくりに向け、関係機関や地域住民のみなさまとともに、全力で取り組んでまいります。

護

美しい自然を護り
後世に伝えたい



利尻富士町長
田村 祥三

利尻礼文サロベツ国立公園が令和6年9月に国立公園として指定50周年を迎え、ここに記念誌が発刊されますことに心からお祝いを申し上げます。

あわせて、これまでの半世紀にわたり、自然保護や環境保全などに、多大なご尽力を賜りました関係者のみなさまに、あらためて感謝を申し上げます次第です。

利尻礼文サロベツ国立公園は、山岳、お花畑、湿原、海岸砂丘など変化に富んだ景観を誇る日本最北の国立公園ですが、その中でも利尻山は、「利尻富士」とも呼ばれる美しい山で、国立公園のシンボリックな存在となっております。

利尻山も、昨今では登山道の侵食や荒廃など、さまざまな問題も抱えておりますが、関係する多くの方々との連携により、利尻山コマドリプロジェクトや利尻ルールの徹底など、美しい自然を後世に伝えていくための取り組みが継続されております。

国立公園指定50周年を一つの契機に、国民の癒しの場としての、この美しい自然を私たちの共有の財産として位置づけ、地域との交流や連携のもとに、さらに魅力ある地域となるよう、関係機関や地域住民のみなさまとともに取り組んでまいります。

継

多様ないきものを
次の世代へと引き継ぐために



礼文町長
小野 徹

令和6年9月、利尻礼文サロベツ国立公園が指定されてから半世紀という節目の年を迎えられたことは、国立公園の構成自治体として大きな喜びであり、心からお祝い申し上げます。

指定以来50年、利尻礼文サロベツの雄大な自然を守るために並々ならぬご尽力をいただきました。関係者のみなさまに改めて感謝申し上げます。

当町では、礼文島いきものつながりプロジェクト（礼文町生物多様性地域戦略）を策定し、レプンアツモリソウなどを代表とする礼文島の希少植物等を次の世代へと引き継

ぐための取り組みを行っております。

この利尻礼文サロベツ国立公園の素晴らしい自然を次の世代へと引き継げるよう、これからも国や道、関係自治体及び関係団体、地域住民との連携を深めながら、この豊かな自然をどう保全し、どう活用していくか、みなさまとともに考え、ともに取り組んでまいります。

結びに、利尻礼文サロベツ国立公園指定50周年を迎え、これまでご尽力いただきましたみなさまに衷心より敬意を表し、メッセージとさせていただきます。

共

豊かな自然と
共存していくために



豊富町長
河田 誠一

利尻礼文サロベツ国立公園が本年で指定50周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

本国立公園は、日本最北の国立公園であり、公園を象徴する秀峰「利尻山」、貴重な高山植物のお花畑「礼文島」、日本最大級の高層湿原「サロベツ原野」など、地域固有の多様な魅力が集まって成り立ち、変化に富む素晴らしい景観を誇っており、これまで多くの来訪者を魅了しております。

本町では、平成16年度から自然再生推進法に基づく「上サロベツ自然再生協議会」を設置し、地元住民、有識者及び

関係団体が構成員として、サロベツ湿原の再生に向け、各種事業に取り組んでおります。

豊かな自然と共存していくためには、このかけがえのない財産を次世代に引き継いでいくことが重要であり、我々に与えられた使命と感じております。

これからの50年、この日本の宝を維持保全していくためにも、地域住民や関係機関が一体となって、更なる魅力づくりを図り、活力にあふれる地域となるよう、みなさまとともに取り組んでまいります。

紡

古くから紡がれてきた
自然とともに歩みたい



幌延町長
野々村 仁

国立公園指定50周年、誠に
おめでとうございます。

利尻礼文サロベツ国立公園が指定50周年を迎えるにあたり、構成する1市5町の一員として感慨もひとしおであると同時に、その歴史に敬意を表します。

利尻礼文サロベツ国立公園は、昭和49年9月に日本最北の国立公園としての指定を受け、以来今日まで私たち幌延町民はこの半世紀、自然の恵みとその保護の重要性を学びつつ、自然とともに歩み、恵みを楽しみ、自然を慈しむ心と自然を守る責任を大きく育んでまいりました。

この間雄大な本国立公園の自然保護や環境保全への啓蒙普及活動など、さまざまな分野でご尽力された関係者みなさますべてに、改めて深く感謝申し上げます。

我々は本国立公園の事業に向け、古くから紡がれてきた貴重な自然景観や動植物が織りなす生態系の保全を図ることにもちろん、環境教育の一層の推進、また環境に配慮した農林業の振興など、自然と人との調和と共生を意識した持続可能な地域づくりに向け、関係機関や地域住民のみなさまとともに歩んでまいりたい所存です。

未来に向かって アクション!

山と海が見渡せる最高のロケーションの中にある利尻高等学校には、現在、約60名の生徒が通う。授業のカリキュラムには、利尻山登山やまちの施策に携わる取り組みもあり、これらを通じて「ふるさどを見つめ直し、自分のできることとはいったい何か」を考えてきた。今年は国立公園50周年記念式典に合わせ、2年生18名が日頃の成果を発表する。島の未来を担う高校生たちは、どんなアクションを起こすのか？

風景の動画を
つくりたい

観光スポットを
ブログに載せたい

登山道の現状を
伝えたい

島の人々の
暮らしを紹介したい

壁画をつくって
まちを明るくしたい

謎解きサイトで
魅力を発信したい



利尻礼文サロベツ国立公園 50周年記念式典で魅力を発信

7月初旬、式典に向けた活動についての中間発表が行われた。風景をテーマにポスターや動画を制作する案や島の人々に取材する案など多彩なアイデアが飛び交った。また、島が舞台の謎解きゲームサイトの制作や島の各所に壁画を描くイベント開催の提案も。式典だけでは終わらない、島に新しい風を起こしたいという熱い思いが教室には満ちていた。



架空の世界でみんなが暮らせる場をつくってみたいと、同級生からアイデアを聞き出し、パソコンにメモ書き。さて、ここから何が生まれるか？

発表の後、共通点のある企画を挙げた生徒同士がグループとなってディスカッションを行い、企画をブラッシュアップしていく。



一人ずつ前に出てプランを発表。文章だけでなく資料写真や動画なども交えてプレゼンテーションが行われた。



RISHIRI
利尻町



りしりん

島の人は元気がいい

利尻町定住移住支援センター ツギノバ
八木橋舞子



島の人が集う場



雨の日でも楽しめる

島の駅

島で一番古いとされる歴史的建造物を利用した「島の駅 利尻 海藻の里」。ギャラリーやショップ、カフェ、ローカルラジオのサテライトスタジオなどがある。

ツギノバ

旧校舎を利用した「利尻町定住移住支援センター ツギノバ」は、定住移住の相談窓口のほか、カフェラウンジ、コワーキングスペースなどを併設した島内外をつなぐ交流スペース。



ウニっこに会える！

ウニ種苗生産センター

「利尻町ウニ種苗生産センター」では、親ウニを採り、採卵・受精した後、稚ウニをある程度の大きさまで育て、島の沿岸へ放流している。施設の一部は公開。



活がいいウニを味わって

神居海岸パーク

「生産センターでウニの生態を知った後にウニ採りも」。「神居海岸パーク」では5~9月、本物の漁具を使用した漁とウニむきぎが体験できる。

地域おこし協力隊として札幌から移住した八木橋さんは、これまで自身が関わった施設や体験からおすすめスポットを挙げてくれた。2016年に協力隊として着任し「島の駅 利尻 海藻の里」で、海藻を押し葉にするクラフト体験などに関わった。「島の駅にはギャラリーやカフェもあり、雨の日でも楽しめますよ」。

任期を終えた現在は「利尻町定住移住支援センター ツギノバ」で人と人をつなげる活動を展開。その傍でウニむきや昆布干しを手伝うことも。さまざまな出会いを通じて感じる島の一番の魅力、それは「人」。「みなさん元気でポジティブ。温かくて強くて、ときに厳しく、まるで家族のように接してくれます」。

昆布干しは早朝3時から始まる。作業中の会話も楽しみの一つ。「地場産業に携わる中でも、たくさんの方の島の人と出会い、何度も助けられたり、力つけてもらったり。自分を見つめ直すすてきな機会になったんです」。

昆布干し



魅力は「人」です！



ゆっくり景色が楽しめる



息を飲む風景を体験してください

カヌー

大沼の支流、往復2.5キロをカナディアンカヌーでめぐるツアーがある。風の影響が少なく、鳥のさえずりや水の音などをゆっくり楽しめる。



体験したことのない世界

大沼サウナ

大沼が見渡せる大沼野鳥観察館(大沼バードハウス)の敷地で、夏はもちろん厳冬期もサウナが楽しめる。透明のドームテントが休憩スペースとなっている。



いつ見てもカッコいい

こうほねの家

国立公園内にある浜勇知屋展望施設「こうほねの家」。季節によっては水辺のコウホネの花を鑑賞できるほか、利尻富士に沈む夕日が絶景。



ぜひ体験してみてください！

カーリング場

「稚内市みどりスポーツパーク」では年間を通じてカーリングの練習ができ、試合の観戦も楽しめる。旅行者でも気軽に参加可能なカーリング体験会も実施されている。



素材がおいしい！

海鮮

稚内出身の木村さん。父親が漁師。家の食卓には子どもの頃から採れた魚がずらり。「素材が素晴らしいのでシンプルな料理でも味は格別です」。

国立公園があるエリアの6市町で暮らしが、おすすめのスポットや体験、食を紹介。

WAKKANAI
稚内市



りんぞうくん

市内にある公園施設の管理運営を手掛け、スノーボードショップや総合型地域スポーツクラブの代表でもある木村さんは、新たな視点による自然の楽しみ方やアクティビティの企画、運営を行っている。その一つは白鳥が飛来する大沼と周辺をフィールドとしたカヌーとサウナ体験。ダイナミックな自然に包まれ、ここでしか味わえない風景が堪能できる。

将来的にはガイド業を地元スポーツ選手のセカンドキャリアの場となるよう構築中。木村さんは市内のスキー場でスノーボード育成プログラムを立ち上げ現在までに6名のプロ選手を輩出している。「スポーツ×観光×若者をキーワードに、ふるさと稚内をより魅力的な町にしていきたいと思っています」。

SEAS
木村 亘



REBUN

礼文町

あつもと
お待ちしております



ここが絶景!

あつもん



トレッキングコース

島を縦断する7つのトレッキングコースがあり、高山植物が多数見られるのが桃岩展望台コース。桃岩登山口から知床へと続く5.3kmの道のり。

礼文出身で観光協会に勤める川村さんは、島の魅力を「静かでのんびりしているところ」と語る。休日に我が子とピクニックに出かけることも。そんな川村さんに島での楽しみ方を教えてもらった。まずはトレッキング。7つあるコースのなかでも桃岩展望台コースは多彩な花が見られるという。数ある高山植物の中で、川村さんが好きなのはレブンウスユキソウ。「開花は夏ですが、ドライフラワーのように形が残るので長く楽しめます」。

海の恵も豊か。ホッケやタラ、ウニ漁がさかん。「ホッケはフライもおいしい、バーベキューでちゃんちゃん焼きも美味しいですよ」。

利尻富士がパッチリ



北のカナリアパーク

利尻山のビューポイントとして川村さんが挙げたのは「北のカナリアパーク」。映画撮影用につくられた校舎ロケセットがあり内部に撮影資料を展示。

長く楽しめる花



レブンウスユキソウ

町の花に指定されている高山植物レブンウスユキソウ。淡白色の葉を薄く積もった雪にたとえたことからその名がついた。

バーベキューの定番



ホッケのちゃんちゃん焼き

北海道の名物として鮭のちゃんちゃん焼きはよく知られているが、礼文ではホッケが人気。合わせみそとネギを乗せてこんがり焼いて召し上がれ!

ウニ丼! ど〜ん



ウニ丼

夏になったら外せないウニ。高級昆布をたっぷり食べて育てており、濃厚でほんのり甘い味わいが口の中いっぱい広がる。

礼文島観光協会
川村彩歌



ESHIRIFUJI

利尻富士町

暮らしす人に聞く!
まちまちの魅力

歴史のロマンを感じます



泉の袋澗

ニシン漁が盛んだった時代、袋澗は島内に30か所ほどあった。現在でも、その幾つかは残っており、梅村さんのおすすめは「泉の袋澗」。大正5年につくられた。

りっぶくん



りっぶちゃん

富山県出身の梅村さんが移住したのは4年前。以前にウニの殻をむくアルバイトで島を訪れ、温かな人々と知り合ったのがきっかけだ。現在、旅行業と宿の管理を行っている。おすすめは歴史が感じられる場所。明治から昭和の初めにニシン漁で島はにぎわった。その面影を彷彿とさせるのが「泉の袋澗(ふくろま)」。袋澗とは獲ったニシンを海水で保管しておくための石を積んだ防波堤のこと。さらに歴史を深掘りするなら郷土資料館へ。開拓期の生活や漁の雰囲気がよくわかる。昭和30年頃にニシンは姿を消したが、いままた海に戻ってきているそう。「釣ったニシンをいただくことがあって、島の恵みに感謝しています」。



海が真っ白に!

ニシン群衆

ニシンが再来するようになり、5年前から約60年ぶりとなる群衆(くき)が春に起こっている。メスが放卵し、オスが放精すると海が乳白色に染まる。

昔の地図を見てね



利尻島郷土資料館

大正2年に建てられた旧鬼臨村役場庁舎を郷土資料館として利用。梅村さんは古地図を見るのが好きという。「にぎわっていた時代は映画館もあったんですよ」。



おばちゃん自慢の味

ホッケのかまぼこ

あるとき近所のおばちゃんが差し入れてくれたホッケのかまぼこのおいしさに感動したという。各家庭で自慢の味があり、揚げても味噌汁に入れてもよし。



山が迫ってくる

利尻山

島の人は「この角度から見た利尻山が好き」という場所がそれぞれあるそう。梅村さんは野塚展望台のある国道の坂を降りた付近が気に入る。

利尻ボンツアーズ
梅村みゆき



HORONOE 幌延町



365日触れ合える



トナカイ牧場

トナカイに顔をあげたり、冬にはトナカイソリに乗ったりするイベントも。ノースガーデンでは「幻の青いケシ」と呼ばれるブルーポピーも見られる。



オロ-Onライン

日本海を望むオロ-Onラインには、幌延が北緯45度線にあるため、それを表したモニュメントが設置されている。その向こうに利尻山が見渡せる。



秘境駅

人里離れた場所にある無人駅は「秘境駅」と呼ばれ、近年ブームとなっている。幌延にはそうした駅が4つあり鉄道愛好家などから注目されている。



合鴨ラーメン

この町で育てられているサロベツ合鴨を使った料理が飲食店のメニューとなっている。トナカイ牧場では合鴨ラーメンが食べられる。



貞廣拓哉 幌延町トナカイ観光牧場

道北を旅行中にサロベツ原野の自然に惹かれこの町の地域おこし協力隊となった貞廣さん。現在はトナカイ観光牧場に在籍している。「この牧場では一年中トナカイと触れ合えます。町のスポットとして外せない場所」。

貞廣さんの趣味は写真を撮ること。おすすめの撮影スポットは名林公園。「サロベツ原野とは違った街中の身近な自然を感じられます」。もう一つは海岸線が美しいオロ-Onライン。「夕日を眺めるのが最高です」。

食のおすすめは幌延産の合鴨で、飲食店でソバやラーメンとして提供。「鴨の油がしみ出たダシは美味しいですよ」。



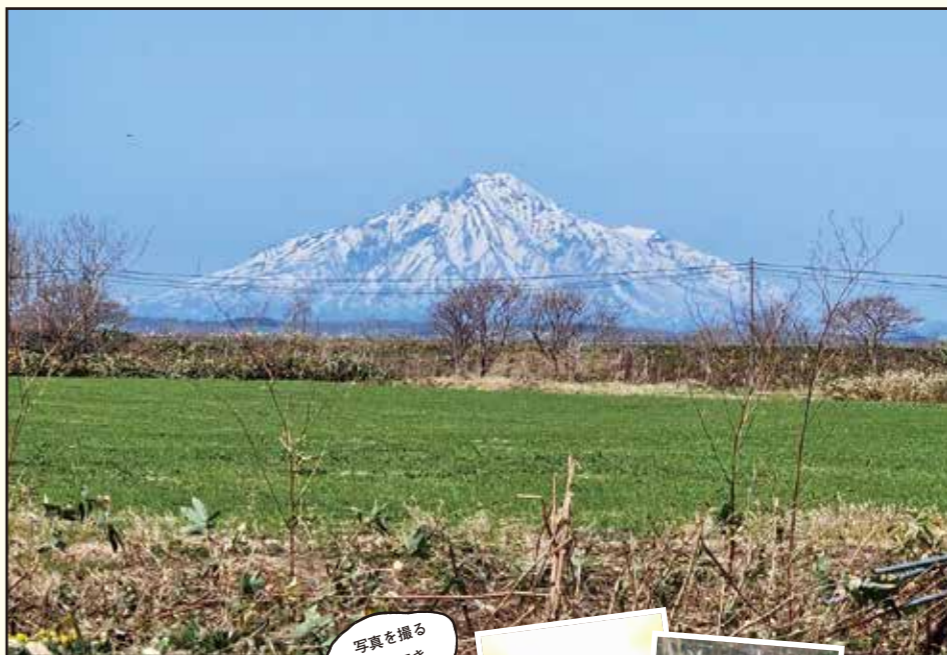
休日にほっこり

名林公園

駅から徒歩8分。散歩がてら名林公園へ！エゾリスにも会えますよ。

TOYOTOMI 豊富町

暮らす人に聞く！
まちまちの魅力



利尻山

利尻山は豊富町側から見るのが一番と下山さん。町には渡り鳥の飛来地もあり、山をバックに鳥が羽ばたく瞬間が格別の景色だという。

写真を撮るのが好き



ミラココで下山さんと活動を共にする熊澤奈音さん(14歳)。

おもちゃ図書館や使わなくなったものを必要な人に届ける「よかつたらどうぞ」スペース、多世代交流ひろばなどがある施設「ミラココ」は子育て世代の強い味方。この施設の代表を務める下山さんが町の魅力としてまず教えてくれたのは、自慢の景色。「豊富町から見た利尻山の形が一番キレイだと思います」。

次に豊富が全国にその名を知られているものとして挙げたのが「牛乳と温泉」。濃厚な口当たりの牛乳は沖縄まで出荷されている。温泉は皮膚炎を患う人が長期で湯治に来ることも多く、その中にはミラココを利用する親子も。「湯治の方も、ここにいる間は町民。ミラココでストレスなく過ごしてもらいたいですね」。



体験ツアー

渡り鳥を見に行くツアーや野生動物を見に行くツアーなど四季折々の企画がある。トレッキングやサイクリングもおすすめ。



豊富温泉

豊富温泉には乾癬やアトピー性皮膚炎になった人が多数湯治に訪れており、町では湯治とワーケーションを組み合わせた取り組みも実施。



豊富牛乳

冷涼な気候の中でのびのび育った牛から絞った豊富牛乳。北海道を中心としたコンビニエンスストアなどで広く流通し豊富ブランドとして知られている。



ミラココ

地域で子育てをサポートする団体があるのも町の特徴。「ミラココ」をはじめ、親子で自然に触れ合う活動をする「サロママ」という団体も。連携しながら活動中。

みんなの居場所です



NPO法人ミラココ 下山絵衣子



利尻礼文サロベツ国立公園 50周年記念誌
「自然と人と。さいはての大地の50年」

2024年10月5日発行

発行：
北海道地方環境事務所
〒060-0808
北海道札幌市北区北8条西2丁目 札幌第1合同庁舎3F
TEL：011-299-1950

制作：
NPO法人 街にいき隊 PRO

デザイン：
尾崎 強志

編集・執筆：
來嶋 路子

撮影：
佐々木 育弥
(表紙、p.2-11、12右中・左上、13左上、18、19左、20、21上、22、24、25上、26、27、28上、
30、31、32下、33、34上、35、36上、40、41、42-47/人物、48)

イラスト：
海道 建太 (p.4-5)
サタケシュンスケ (p.14-17)

協力：
稚内・利尻・礼文・サロベツ観光振興協議会
北海道宗谷総合振興局
稚内市
利尻町
利尻富士町
礼文町
豊富町
幌延町

利尻礼文サロベツ国立公園サイト



【VR360°】
Welcome to
利尻礼文サロベツ国立公園



利尻島
サイクリング



礼文島
トレッキング



サロベツ
アドベンチャートラベル

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、
印刷用の紙へのリサイクルに適した材料【Aランク】のみを用いて作製しています。



これまで自然と人がどのように関わってきたのかという視点で取材を進めていくと、過去を振り返ることが未来へとつながることがわかってきた。自然保護の取り組みは、すぐに成果が見えるものではなく、長い時をかけて少しずつ変化が現れていくもの。この取材で出会ったいずれの人も、まだ見ぬ理想の風景を心に温めながら活動を続けていた。

50年後の未来、この国立公園はどのような姿を見せるのだろうか？ 気候変動や社会情勢の変化など未来は明るい方向ばかりではないが、それでもきつとたゆまぬ活動の先に希望があるのだと思う。

島の高校生が取材の中で語った。「利尻山は毎日見ても飽きることはない」。自然を美しいと思う人の心は、いつの時代も変わらない。私たちの心身にしっかりと刻まれている。

